海外 博物館 事情
Foreign Museums

中国・国家主導の博物館事業

王　京（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・後期博士課程）

明治36（1903）年3月、大阪の第5回内国勧業博覧会場に一人の中国人がいた。1894年の科挙の状元で、日清戦争後、故郷の南通で実業（大生紗廠など）と教育（農学校と師範学校など）に力を注いだ張謇（チョウケン）である。1905年、彼は清朝の「新政」を推進する重臣張之洞に北京で「帝国博覧館」の建設を、また「学部」に「博覧館」の建設をそれぞれ上奏し、皇室の収蔵品を一般に公開し、各省にも博物館をつくり学校教育に資することを訴えたが採択されず、自ら模範を示すために南通師範学校の一部に動物園、植物園と文化財や標本を収蔵展示する「博物苑」をつくった。中国人による博物館の事始めである**（図1）**。張謇が構想した国家主導の博物館事業は、その時代には実現されなかったが、辛亥革命以降、中国の博物館事業発展の大きな土台となった。ここでは国家がリードするという視点から中国博物館発展史の一面を辿ってみる。

1 中華民国・初めての試み

中華民国建国直後、中国最初の国立博物館が構想された。1912年6月教育部総長蔡元培がまず北京に博物館をつくることを提案し、同月25日、準備に当たる社会教育司の第一科長である魯迅が「国子監及学宮」を視察した。7月9日「国立歴史博物館」準備室が国子監で発足し、1917年故宮の正門近くに移った。1926年10月10日、建国記念日に合わせて博物館は開館し、金玉、刻石、明清檔案、国子監文物など10部門からなる展示を始めた。北京の『世界日報』12日の記事は、入館者はのべ7万人に上り、盛況だったと伝えている。

しかし、その後の発展は順調ではなかった。1927年に『教育部歴史博物館規程』が作られたが、翌年6月から博物館の所属は、教育部―大学院―教育部―国立中央研究院歴史言語研究所を転々とし、さらに1933年南京に「中央博物院」準備室が創設されると、その管理下となり、収蔵品の一部が南京に移された。日中戦争や国共内戦の混乱を経て1949年軍事管制委員会の下に移管したとき、収蔵品は1926年当時、26部門215,200点（『国立歴史博物館陳列物品目録』、同『収蔵物品目録』）の5分の1を下回る39,592点であった。また当時、全国の博物館計25館のうち、外国人がつくったものが9館を数えた。

2 新中国・主調は革命

中華人民共和国建国後、博物館事業は教育の一環として重視され、国家主導で大いに発展した。「国立北京歴史博物館」として再発足した歴史博物館は、1950年の「原始社会陳列」を手始めに、1958年には「明清陳列」を完成した（その前に「近代史陳列」が1956年に完成）。この時、マルクス主義の発展段階説による歴史教育に重点が置かれ、考古学の成果を王朝時代順に配列するという中国博物館の基本展示モデルが作られた。

そしてなによりの特徴は革命史の重視である。1951年3月に「中央革命博物館」準備室が成立し、国史と並列する革命史教育の博物館が構想された。6月16日政務院は『為徴集革命文物令』を発令し、1919年五四運動から1949年までの新民主主義革命を中心とした、革命関連の文献と物品を「中央革命博物館籌備処或いは各大行政区、省市文化教育機構に集中し保管」するよう指示した。

1958年北戴河会議で中国歴史博物館と中国革命博物館の設立が決定され、1959年初めの『陳列原則』では歴史博物館の「中国通史陳列」が1840年のアヘン戦争まで、革命博物館の「中国革命史陳列」が1840年からと決められた。同年8月には両館共用の建物が天安門広場の東側に完工し、国家のシンボル的建築物となった。

地方では1959年までに、寧夏（1973年）、青海（1986年）、海南（1990年）、チベット（1999年）を除いて省市自治区の総合博物館が開館し、博物館の全国システムの骨格が出来た。当時「地誌博物館」とも呼ばれたこれら省立博物館は、「自然資源」「歴史発展」「民主建設」を三つの柱とする文化部の『意見』（1951年）を受けているが、実際の展示には「自然資源」「古代史」「革命史」（民族地域はさらに「民族事情」）という構成が多く、地域に密着しながら革命史観を色濃く呈している。さらに専門的な革命博物館・記念館は、地誌博物館づくりが一段落した1959年から多く建設された。

ところが1966年に文革が始まると歴史・革命二館を始め、中央と地方の多くの博物館が閉館を余儀なくされ、1977年までに新しく開館したものは僅か西柏坡記念館、安源路鉱工人運動記念館など革命関係のものだけであった。

3 文革後・革命からの離陸

1980年代から博物館発展は第二のブームを迎えた。1982年中国博物館学会が発足し（翌年ICOMに加盟）、同年11月『中華人民共和国文物保護法』が施行された。文物系統の博物館は1992年になると1950年代の70余から1,100余に増えたが、徐々に革命色が薄まったことが大きな特徴である。『中国博物館志』によれば、1966年以前、省立博物館以外はほぼ革命一色であったが、文革後、地質、少数民族博物館や紡績、茶葉などをテーマとする地方の産業博物館などが着実に増加し、80年代中期以降新設博物館の主流になっていった（表1参照）。また省立博物館の自然資源の部と革命史の部も縮小するか、専門博物館として独立したケースが多い。

表1 文革後新設博物館の変容
（『中国博物館志』1995年に挙げられた主要な博物館に限る）

種別	1978	1979	1980	1981	1982	1983
革命	4	1	2	2	3	0
其他	3	4	1	1	4	3
種別	1984	1985	1986	1987	1988	1989
革命	2	4	2	1	2	0
其他	6	10	15	5	6	8

1996年の「社会主義精神文明建設」を強化するための決議では、博物館の重要性がさらに強調され、従来の歴史と革命の二館を統合する「中国国家博物館」の設立が決められた。翌年、中国の博物館を総覧するプロジェクトが発足し、香港、マカオ、台湾を含む総ての省市自治区から100館が選ばれ、3年間38万キロの取材による、102回ものドキュメンタリー映像シリーズ『中国の博物館―100の博物館が物語る過去』（DVD26枚組、中国語・英語、国際文化交流音像出版社販売）が完成し、1999年に放送され、大きな反響を呼んだ。「全国博物館の優れたもの、特色のあるものをひとつも漏らさず」（説明文）と宣言しているこのシリーズには、革命を主題とした博物館は全く見られず、中国革命博物館さえ入っていなかった。

4 21世紀・新たな情熱

2002年10月28日、非移動文物・考古発掘・施設収蔵文物・民間収蔵文物など8章80条からなる新しい『文物保護法』が可決され、翌年、初めての博物館専門法『博物館条例』の草案も完成した。

そして2003年2月28日中国歴史博物館、中国革命博物館が中国国家博物館に生まれ変わった。かつて二館は1966年から1983年まで「中国革命・歴史博物館」として合併していたが、今回はそれとは異なり、革命史から豊かな近現代史へという史観の根本的な転換が国家レベルで示されている。40億元で増改築される国家博物館は、2008年北京オリンピックに合わせて開館する予定で、アメリカのメトロポリタン美術館、イギリスの大英博物館、フランスのルーブル美術館に匹敵する、博物館大国、中国を象徴する施設として位置づけられている。

地方においても北京、天津、四川で省レベルの新館をつくるほか、特色ある博物館の新設をサポートし、2015年までに更に1,000館を増やしていく計画であるという（2002年12月全国文物事業会議）。21世紀に入り、中国は博物館事業に対する新たな情熱を見せ始めている。（図2）

しかし中国の博物館事業は、市場経済に対応する体制の模索、専門人材の育成、博物館関係の立法や財政の確保、展示や社会教育における創意工夫など、直面する問題がまだ数多く、その見通しは明るいものだけではない。新たな時代、国家主導の博物館事業は如何に発展を遂げ、またどのような特徴を見せるのか、見守っていきたい。

参考資料
■中国博物館学会編『中国博物館志』北京華夏出版社、1995
■王宏均主編『中国博物館学基礎』（改訂版）
上海古籍出版社、2001

図1 張謇（1853～1926）と南通博物苑の自筆の双幅

図2 中央テレビ局CCTV－10の新番組『五日談・博物館』（2004年2月より木曜午後8時放送）と「2004北京国際博物館々長フォーラム」開催後に放送された特集「博物館に親しむ」（5月26日放送）のテーマ画面